

彼岸前

丹羽文雄

彼岸前



新潮社版



© Fumio Niwa 1980, Printed in Japan

彼岸前ひがん まえ

昭和五十五年九月十五日印刷
昭和五十五年九月二十日発行

著者 丹羽文雄に ぶん お

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一

電話・業務部(03)二六六五一二

・編集部(03)二六六五四二

振替 東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製函所 文京紙器株式会社

製本所 神田加藤製本

定価 一二〇〇円

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

中華料理店	7
雨戸のせい	25
彼岸前	49
山荘	71
病室にて	89
うとましい人	111
犬と金魚	135
虚実	159
ひとりごと	197

裝
画

三
岸
節
子

彼

岸

前

中華料理店

中華料理店

店の中は、すべての物が脂じみていた。天井も柱も壁もテーブルも、カウンターの台までそうであった。テーブルは、七つ八つあった。三組の客が小声で話しこんでいた。街の中の、ありふれたラーメン屋ふうの店だったが、中は意外にひろくて、客種や店の主人や給仕女の顔立が、日本人ではなかった。そう思っただけに目を落すと、コンクリートの汚れ方にも日本ばなれがしている感じがあった。かれは、ときどきこの店に来た。客のほとんどが中国人であった。はじめの内は、まちがってとびこんで来たかのような跋の悪さをおぼえたが、主人はあいそがよかった。それにこの店の料理は、ホテルの中華料理や、何々楼といったところの料理とはちがっていた。ひと味ちがうという、テレビのコマーシャルの文句を、かれは必ず一度は思い出した。本格的な中華料理であった。だから、中国人の客が多いのだった。一度このものを食べると、あとを引く。かれはここを出会いの場所を選定したことに、満足していた。口の悪い子供たちにも、文句はいわせない。

そばの娘が、何ということなしに父に笑いかけた。その笑いは、娘の気持が決して平静な状態でないことをいつていた。かれはうなずいてみせ、つとめて朗らかな顔をつくった。が、むしろかれの方が椅子をはなれて、表に出て、空気をいっぱい吸いたいくらいであった。

——何でもないことだ。たがいに顔を見合わせたなら、それで一挙に片付いてしまうのだ。何といつても血を分けた兄妹ではないか。困難を予想して、もやもやしている必要はない。

かれは自分にいきかせた。娘は腕時計をみた。

「いまに来るよ。きつと来る」

娘は重大事件を前にして、たよりない気持になっていた。この出会いの重大さを紛らすためには、かれは卓におかれた娘の手にそつと自分の手を置く必要を感じた。そのとき、娘は何かほかのものに氣をとられていた。かれは、娘の顔をみた。娘の視線が、縄のれんのようなカーテンをとおして、その奥の、小さい部屋だが、まん中に大きな丸いテーブルが置かれ、そこに泰然とこちらに背を向けた、中年風の紳士に注がれていた。街中の普通のラーメン屋のようにみえるこの店には、不釣合な客であった。紳士とみたてたのは、うしろ姿だけでも、高級服と判ったからだ。姿勢が正しい。顔が見たくなるような姿勢であった。

その客は、特別の客のようであった。給仕女が料理をはこんでいく。給仕女が笑顔で、何か喋っている。客は頭を動かさず、しかしあいそよく給仕女と喋っているようすであった。なじ

みの客にちがいない。給仕女は、片ことの日本語しか使えなかった。五、六回、半年ちかくかは通ったが、給仕女の日本語にはすこしも進歩がなかった。まわりが中国人ばかりでは、おぼえる機会がないのか。それとも生国のことを堅く守っているのか。

そのとき、かれの子供がふたりはいつて来た。かれと娘のテーブルをみて、まっすぐに近付いた。

「車がこんでね」

兄がいった。

「そうだろうと思っていた」

かれが答えた。娘ははっとしたふうだったが、それほど顔色を変えなかった。テーブルをかこんで、四人が向き合った。

「紹介しよう。こちらが京子」

かれは娘を手で指した。娘が笑わず、頭を下げた。

「こちらが兄の優一郎、弟の謙作だ」

兄弟は、娘にはじめて会うことに、大して興味はもっていないふうであった。言い合わせて来たのではない。かれには判っていた。友達妹でも紹介されたようにうなずくと、

「はらがへった。何か食べたいよ。勝手に注文していい？」

兄はテーブルにあるメニューをとりあげた。メニューは漢字ばかりで、日本語の訳はついていなかった。兄はそれで気がついたように、あらためて店内を見まわした。弟がメニューをうけとった。そして兄と同じように店内を見まわした。娘は目を伏せていた。娘ははぐらかされたように、とりつくしまがなかった。その思いを眸に托して、かれの顔をみた。かれには、兄弟の気持が手にとるように判ると思った。つまり兄弟は、てれているのだった。わざと重大な出会いを、何でもない出会いのようにふるまいたいのだ。

自分らに妹があると初めてかれから知らされたとき、

「可哀そうに、どんぐり目で、赤ら顔で、親父さんそっくりの顔をしてたら、お嫁にもらい手がないだろうな」

と、兄が笑った。が、かれは若いころからハンサムであった。六十になったが、その面影は消えていなかった。男の子供たちが、かれをハンサムと見なさないのは、若者の反抗心のあらわれであり、かれの時代の美意識をみとめていないからであった。兄弟は髪をのばして、いつも始末におえないような頭をしていた。かれがその頭髪にふれると、

「親父さんの感覚は、古いよ」

と、一笑に付した。

それでもかれがいろいろとつづけると、

「だから親父さんは、破産してしまつたんだ。いくらもかくし金がつくれたのに、債権者に申訳がないといって、自分から進んですつ裸になつてしまつたのだ。バカけているよ。いまだきそんなバカ正直な社長は一人もないよ。とにかく親父さんの人生観は、過去の産物だよ」

それをいわれると、かれには抗弁のしようがなかった。兄は現在、妻子を擁えて、立派に自分ひとりの力で仕事をしている。弟も結婚して、妻は妊娠中であつた。会社につとめていた。かれは兄弟が一本立ちするとき、手を貸してやるのが出来なかつた。

「夜間教室で簿記を教えるなんて、ばあつとしないだろう。うちで使つてやるよ。いきなり重役にしてやるよ。何もしくともいいんだ」

しかし、かれは子供の世話にならなかつた。夜間学校の先生は、友人に頼まれて引きうけたが、たかのしれたサラリーであつた。手形の金を埋めるために、日夜かけずりまわつた当時のことを思うと、たとい息子 회사にしても、会社と名のつくものから疎遠でありたかつた。

料理が来て、四人の食事がはじまつた。兄ははらをへらしていた。兄弟の健啖ぶりをみると、娘は深刻にふるまいたくても、ふるまいようがなかつた。兄弟は自分らで話合つたり、笑つたり、ときにかれに話しかけたりしたが、娘を無視した。娘は家庭にあつては、中心的な人間であつた。かれですら、娘に仕えるようにふるまつた。

「パパは、ここの料理がおいしいといつてただろ」

娘に話しかけた。

「是非一度パパは、京子に食べさせたかったんだよ」

かれがパパと自分のことを発音したとき、いまにも兄がふき出しそうになった。兄は、いそいで自分の口を手で抑えた。それは弟の方にも、おなじようなおどろきであった。かれは、兄弟の小さいころから、一度も自分のことをパパと呼ばせたり、自分からパパと呼んだりしたことがなかった。お父さんであった。

かれは、兄が笑い出しそうになったのに、気がつかなかった。かれは娘にはやさしく、男の子に対しては対等に口をきいた。かれはそれを意識しなかった。かれは兄弟がはいって来たときから、心の調子を狂わせていた。どちらの子に対しても、いつもの自分らしくふるまっていた、子供らの前になげ出したのだった。ここに三人のはらちがいの子供がいる。この三人は、いわばかれの人生の証明であった。おのれの人生を、三人をみることによって、客観的に見ていることになる。

娘はいつかからか、自分のほかにはらちがいの兄のいることを知っていたが、かれに訊くことをおそれた。かれもまた、娘が気付いていることを感じながら、そのことに触れなかった。出来れば、永遠に事実を知らせたくなかった。が、そんなことは不可能であった。第三者から娘